

# 女高師オーラルヒストリーにおける談話の重層性

—女高師とお茶大との連続性に対する認識—

加藤 厚子

はじめに

東京女子高等師範学校卒業生に対する聞き取り調査（以下、「女高師オーラルヒストリー」と略記）は、テーマオーラルとして開始され組織オーラルへと展開したプロジェクトであると同時に、「談話による個人史」の集積でもある。女高師オーラルヒストリーは、大学史という組織・団体史と個人史との交差部分を談話の形で収集した調査であり、その性格ゆえに、談話が有する重層性が現われやすい傾向がある。

談話による個人史の分析・検討には、ライフストーリーとライフヒストリーの二つのアプローチの方法が存在するが、両者は談話に対する認識において異なっている。ライフストーリーは「口述そのものの記述」<sup>アカウント<sup>(1)</sup></sup>を重視し、談話の語り手だけでなく、調査者<sup>II</sup>聞き手をもまた調査の重要な対象として位置づけ、聞き手の質問・語り手の語りを総体として包括的にとらえる点に特徴がある。すなわち、談話をとりまく状況<sup>II</sup>ハードという枠組みの存在を大前提として、談話をソフトととらえる認識である。これに対し、ライフヒストリーは調査者が語り手の語りに史資料による補助データを付加したり時系列順に整理したりすることで再構成を行うものである。重視されるのは談話に含まれる情報であり、談話は枠組みから独立したコンテンツとして認識される。また聞き手はあくまで第三者であり、語り手に変化を及ぼさない「触媒」

として扱われることが多い。

本来、ライフヒストリーはライフストーリーの上位概念であるが、聞き取り技術や研究方法において、両者は並列・対照的な位置に置かれている。この位置づけは歴史学が前者を、社会学が後者を多用するという学問分野の違いに由来すると推測されるが、どちらか一方の概念のみに依拠して談話を処理することには問題があると考えられる。ライフストーリーの概念では談話をとりまく状況を大前提に総体として談話を扱うために、談話の一部分を取り上げると、それは文脈から切り取られた途端に意味を喪失することになってしまう。またライフヒストリー概念では、聞き手を第三者として扱うため、誰が聞き手であっても談話の内容・分量は変化しないことになり、聞き手の属性・特性が語り手や談話にもたらず変化を看過してしまうことになる。

女高師オーラルヒストリーのテープ起こし原稿は、時系列に再構築したライフヒストリーの形態を採用しているが、これはお茶の水女子大学大学資料委員会が保管する公的文書や個人文書、写真・絵画や物品・教材などの現物資料、『お茶の水女子大学百年史』<sup>(2)</sup>や各種同窓会組織の刊行物、個人の手記など、既存の史資料群との有機的連関性の形成を目的とするためである。

女高師オーラルヒストリーは既存の史資料群を「補完」するためのものではない。オーラルヒストリーを歴史資料として扱う場合、内容に対する証拠性の確保や、他の史資料との整合性が問題になる。ライフヒストリーで既存の史資料群を「補完」するならば、他の史資料との照合や談話内容の真偽確認が必要であるが、今回の女高師オーラルヒストリーではそのような作業をあえて留保し、まず既存の史資料群との有機的連関性を形成することを目的とした。例えば体育科卒業生の談話に関して、文書史料である体育科のカリキュラムや写真資料を関連づけ、さらにその写真に写っている教官に関して、文科卒業生の談話を関連づける、という作業を行っていった。そのため、ライフストーリーの形で収集した談話を、時系列に整理したライフヒストリーの形態に再構築する必要があったのである。今後、大学史がデータベースやDVDの

形態をとる可能性があることを考えれば、複数資料間の有機的連関性の確保は非常に重要であると考えられる。<sup>(3)</sup>

女高師オーラルヒストリーは、大学という組織・団体の歴史と個人史とがクロスオーバーした部分を採録したものであり、語り手が語るのは、時に時系列から逸脱するも個人のなかでは完結している「ストーリー」である。前述のように、ライフヒストリーの概念では聞き手は「触媒」に過ぎないが、女高師オーラルヒストリーでは、「お茶の水女子大学（以下、お茶大と略記する）大学院の在学生」という聞き手の属性が、談話の形成に大きな影響をもたらしていると推測され、ライフヒストリー概念を視野に入れた分析が必要であると考えられる。本稿は、聞き手の属性を考慮しながら、聞き手と語り手の間に発生する「学校の先輩・後輩というスタンス」を手がかりに、談話が有する構造とその特徴を考察する。

### 一、女高師オーラルヒストリーにおける聞き手と語り手の「スタンス」

今回の聞き取りはシンポジウムから派生したプロジェクトであったため、当初設定された聞き取りのテーマは「女高師学生の戦時経験の聞き取り」であり、対象時期は昭和一〇年代から終戦直後としていたが、開始直後から、対象者のライフストーリーを聞く方針へと転換した。語り手が前段・余話として語る談話のなかに、当時の女性の将来設計における進学の意味、女高師への志望動機、卒業後の人生において女高師での経験が果たした役割など、個人史における在学経験の位置づけ、すなわち大学史と個人史とのクロスオーバーを考えていく上で重要な点が多く含まれていたためである。

この方針転換は、談話の構造分析を前提とした戦略的なアプローチを志向したのではなく、聞き取りの現場に直面しての自然発生的なものであるが、今回の聞き取りが期せずして、「対話的構築主義アプローチ」を採ったことに起因すると思われる。対話的構築主義アプローチとは、ライフヒストリーの語りを、「かならずしも語り手があらかじめ保持していたものとしてインタビュアーの場に持ちだされたものではなく、語り手とインタビュアーとの交互行為を通して構築され

るもの」という認識に基づき行われるアプローチのことである<sup>(4)</sup>。一連の聞き取りは、「語り手Ⅱ女子高等師範学校の卒業生」と「聞き手Ⅱお茶の水女子大学大学院の在學生」との会話を通して構築され、語り手と聞き手との関係性が、「戦時体験」に一点集中した聞き取りではなく、より広いライフストーリーの聞き取りを要請したと考えられるのである。

談話において、語り手と聞き手との間には様々な「スタンス」が出現する。これは両者間に構築される固定した「関係」ではなく、談話のなかで刻々と変化する、語り手と聞き手の「距離」や相手に対する「認識」であり、ひとりの語り手は複数のスタンスを使い分けながら語りを進めていく。スタンスは流動的で複合することも多いため、スタンスを厳密に区分することは不可能であり、また曖昧な概念である。しかし、談話のある場面において基盤となるスタンスを指摘することは可能であると考えられる。語り手・聞き手はそれぞれ付表の通りであるが、多くの事例に共通して出現したスタンスは、「部内者・部外者」「学校の先輩・後輩」の二種である。

#### (一) 「部内者・部外者」スタンス

これは語り手と聞き手の学科が異なる場合に採られるスタンスである。次の事例は、体育科卒業生が所蔵する写真をめぐる会話である（以下、話者記号は付表による）。

##### 〔事例一〕

聞き手 袴が木綿の袴だったと聞いたんですけど。

F氏 そんなことありません。私達よく捻挫して足を痛め靴がはけないので草履を履かせてもらうときは生徒主事の先生の許可をもらわないといけなかった。袴をはいても靴だったのよ。

聞き手 なんで草履じゃいけないんですか。

F氏 違反なの。

聞き手 草履の方が見栄えがいいのに。

F氏 何でも鹿鳴館時代の名残とか。(引用者注:体育科会の写真を見せながら)これが体育科会。

聞き手 体育科会?体育科だけ?

F氏 そう。時々体育科全体で楽しめます。

冒頭、聞き手が別の語り手から得た情報を提示するとF氏はそれを訂正して話題を履物に変更し、さらに後半では談話の主導権が聞き手からF氏に移動し、F氏が体育科出身ではない聞き手に説明をするという形になっている。今回はA氏・G氏の事例を除き、語り手と聞き手の所属学科が異なっていたため、語り手が聞き手に対して学科やカリキュラムの説明、写真の説明などを行う際にこのようなスタンスがしばしば現われた。

## (二)「学校の先輩・後輩」スタンス

このスタンスには、「在学生が卒業生に聞き取りを行う」というインタビューの依頼方法が影響していると考えられる。<sup>(5)</sup>桜蔭会という同窓会組織を経由したことによって、語り手―聞き手関係が「学校の先輩・後輩」のスタンスを招来したものと推測されるが、形式的な要因だけではなく、語り手が女高師とお茶大との連続性を意識した際に、このスタンスが出現すると考えられるのである。

女高師オーラルヒストリーで判明したことであるが、昭和一〇年代の女高師では同じメロデーで歌詞が異なる替歌が盛んに歌われており、スキー合宿、戦時下の動員などのバージョンが確認されている。次に挙げるのはその替歌をめぐる会話である。

### 〔事例二〕

H氏 御講義頂いた先生方の替歌が、ありましたよ。

聞き手 ではこの歌のリズムっていうのは女高師では色々な替歌で。

H氏 そのようですね。あなたがたも歌っている？

聞き手 いやいや！

H氏 あの頃は色々な替歌があつて歌ったわ。学友と歌うことが息抜きというか、一つの楽しみだったのでしょう。本当に学生時代つて、かけがえのない日々でした。

ここでH氏は「替歌文化」が現在もあるかを聞き手に尋ねており、これは「学校の先輩・後輩」のスタンスの背後で、H氏が女高師とお茶大との連続性を意識していることがうかがえる。

### 〔事例三〕

聞き手 戦後、東京女高師というのがなくなつて、お茶の水女子大学というのになつたわけですが、その過程で、卒業生の中から、女高師をどういうふうに残していくかという運動のようなものは、桜蔭会等でありましたか？

G氏 東京女高師の人といつたら、そういうことをするような人はいないわ。東京の人はいたかもしれないけれど、そういう馬鹿な役を買つて出るような人はいない。皆賢いから、横からじつと成り行きを見ている。名前は何か、お茶の水にもないのにお茶の水女子大学というのになつて、変なことをしたなと思うんだけどね、それなりに残つた。東京女高師は官立だしね、見ていたつて何とかなるわと。かえつて、出て行ったら危ない。女高師の方は、動いたら損だつていうことが分かつていて、皆じつと成り行きを見ている。今でもそうです。走つて出たら、かえつて危ない。じつと成り行きを見て、まあ今まで残つてきているわけですよ。女高師の人は、おつちよこちよいに動かない。動いたらかえつて損だ。だから何とか残るだろうとは思うけれど、大変ね。今はどこの大学でもすごい（引用者注：統合を）している。だけど私はいいいことだと思つよ、

今は過渡期だけれど。少子化になっているのだから、あまり沢山の大学があるより、大きくなった方が。お茶の水は、どこかと統合しないの？

聞き手 今のところはしないということになっています。

G氏 だけど消されるっていうことは、ないと思うけれどね。

G氏は名称を明確に使い分けているが「それなりに残った」「今まで残ってきているわけですよ」「何とか残るだろうとは思うけれど」という表現からは、連続性を強く意識していることが分かる。

#### 〔事例四〕

聞き手 最後の方ですが、現在のお茶大に対してお感じになつてゐることとか、もしうかがえましたら。

B氏 私も考えてみたんだけど。昔のお茶大マと言うのは、男女の別で学校もちゃんと分かれているから、女子のまあ最高学府はお茶大マだつてことだったけど。戦後は男女の差別がなくなつて。そういうところで女子だけの学校と言うのは、どういう存在の理由があるのかなと思うとクエスチョン、何とも言い難い。女子じゃなくてはならないっていうのは殆どないと思う。男女の別、分けるなんていらぬんじゃないかと。だからお茶大が今のまま生き残つていくの難しいんじゃないかな、と思う。

内容からB氏は女高師とお茶大とを区別して考えていると推測されるが、B氏は本来「女高師」というべきところを「お茶大」と言つてしまつてゐる。この混同は逆に、女高師・お茶大の連続性に対する意識のゆらぎを示しているということが出来る。

学校制度上、女高師とお茶大とは連続しておらず名称も異なる。また学科やカリキュラムなど学内制度も異なつてゐる。しかし、聞き手と語り手との間には「学校の先輩・後輩」スタンスが出現するのである。桜蔭会は女高師・お茶大の卒業生を包括する組織であり、前述のようにここを経由したこともその一因であるが、「事例二」のH氏の発言は、学校制度

や時期の違いを超えた学校文化の連続性がある、という認識を示している。

また、付表の渡部・加藤・河上・金高を除く聞き手は、他大学の学部を卒業し大学院からお茶大に入学した学生である。アポイントをとる時やインタビューに入る前、語り手が聞き手に対しお茶大出身か否かを尋ねることがあり、他大からの進学であると聞き手が答えると、逆に進学理由を尋ねられることもあった。これは語り手が、「学校の先輩・後輩」のスタンスを聞き手との間にどの程度形成できるかを確認する作業であったと推測される。しかし他大出身という属性はマイナスにはならず、やはり「学校の先輩・後輩」スタンスが出現した。聞き手側も「お茶大の」大学院生という意識で質問を行っており、「学校の先輩・後輩」スタンスを採っているのである。

女高師・お茶大の連続性に対する語り手の認識は一個人においても流動的であると推測されるが、「連続性がある」という認識を出現させる要因としては、同じ場所にあること、女性の高等教育機関であることが考えられる。佐々木啓子は、数量分析によって、戦前の総女性人口における割合が非常に少ない高学歴女性のライフコースが他の女性と異なる傾向を示すことを明確化し、教育とライフコースとの関連性を指摘しているが、個人の認識レベルにおいても、女高師卒業生が独特なアイデンティティを持ち、それに基づき自らのライフコースを回顧していることが確認できる。<sup>(7)</sup> 女高師在学中の経験や、女高師卒業生という経歴は、語り手のライフヒストリーにおいて特別な意味を有しており、談話全体の構造にも影響していると推測されるのである。

## 二、談話におけるモデル・ストーリーの特徴

談話には、個人の「パーソナルストーリー」、共同体内で共有され共同体の建前として特権的に語られる「モデルストーリー」、社会全体の支配的言説であり、社会通念と呼ばれる「ドミナントストーリー」が存在するという考察がある。<sup>(9)</sup>



これを女高師オーラルヒストリーに当てはめると、次のようになると考えられる。

パーソナルストーリー ― 個人としての談話

モデルストーリー ― 女高師の学生としての談話、○○学科学生としての談話

高学歴女性としての談話

ドミナントストーリー ― 昭和戦前期の社会通念を示す談話

各ストーリーの重層により談話は形成されており、ストーリーによって、聞き手と語り手のスタンスも変化する。また各ストーリーは分離できる性質のものではなく、ひとつの発言が複数のストーリーの性質を帯びている場合もある。女高師卒業生のライフストーリーをみた場合、モデルストーリーに二つの特徴があると考えられる。

第一は、太平洋戦争期における切迫感の希薄さ、校内の自由な風潮への言及である。一般的に、戦争はドミナント・ストーリーの領域に含まれ、「生活の困難」「身内の死傷」など、苦勞・苦痛を伴うマイナス要因を用いて語られることが多い。特に本土空襲があった太平洋戦争後半期に関しては、「苦勞・苦痛」は戦争を語る際の支配概念となっており、逸脱が許されにくいという社会的背景もある。『お茶の水女子大学百年史』でも太平洋戦争末期の困難が強調されているが、女高師オーラルヒストリーにおいて、当該期に女高師に在学していた経験（以下、女高師経験と略記する）に関する苦勞・苦痛の表現は少ない。次に挙げるH氏は一九四三年四月入学・一九四五年九月卒業（半年繰り上げ卒業）であり、在学中に愛知航空に動員された経験がある。聞き手側では、H氏以前に行った卒業生への聞き取りから、太平洋戦争開戦以降、体育科の恒例行事であった遠泳・スキーはなくなったと推測していたが、H氏は在学中に遠泳・スキーが行事として実施されていたことを証言した。

#### 〔事例五〕

H氏 発哺の山小屋へ行きましたよ。志賀高原へ。昭和一八年の暮れか一九九年のお正月か、冬休みに冬季訓練とし

て。

聞き手　そうですか。それで遠泳というと、一〇キロ。

H氏　一〇キロ。鯨波というところが合宿の地で、お寺だったのでしょうか。一年の夏だったと思います。鯨波から柏崎方面へ。一〇キロだったと思います。体育科と家体（引用者注：家事体操科）が全員一緒に行きました。（中略）手でね、下の砂をね、掻きながら岸に上がっていったの。小さなスナップですがよくこんな写真があったことね。「太平洋戦争にも関わらず、国立ゆえに、海洋訓練として新潟県鯨波へ合宿、体育科・家事体操科」と記しています。冬季合宿も訓練としてですね。「他大学にはきつとないだろうな、やっぱりこの学校だからかな」と先生が申されていました。

（中略）

聞き手　ずっと色々な方に聴き取りをしていて、戦時体制に入っていく中で、女高師が何か変化することはありましたか、というのをよくお訊きしているのですが、多くの方が変わらなかったと仰っています。それも、動員とか授業がなくなるという表面的な変化というのはあるけれど、授業の内容というのは変わっていなかったし、先生方も特に戦局についてお話しすることもなかったと。

H氏　そういうことは全然ないです。皆専門を、詳しく丁寧に、ちゃんと聞かせてもらいました。だからそれが受けられていた頃は、本当に幸福でしたよ。

また、H氏は遠泳の思い出として、白いシートと懐中電灯を使った上級生の肝だめしに驚かされた経験を、懐かしく楽しい思い出として語っている。また次に挙げるE氏は一九四七年三月卒業で、在学当時は遠泳・スキー行事は中止され農村動員が行われている。

〔事例六〕

聞き手 昭和十八年以降の女高師の様子について、お聞きするの初めてなので、いろいろ考えて百年史を見てさらってみてはいたんですが、当時のことを考えると、考える余裕もないんだなと。

E氏 その時は生徒だったからですけど。今考えると、女高師も、割と戦争中であっても、所謂、軍国主義に徹底して走っていった学校ではなかったんだと思います。だから生徒もね、そんなになんて言うか。ただ戦争中で動員があるから、先輩達が名古屋の。

聞き手 愛知航空ですか。

E氏 そういう所にね、行って空襲に遭っていますからね。だけれどもそういう事、みんなしているけれど、それはそれで、自分たちの立場として素直に受け入れて、そういう危ない危険なところで働いていた。

〔事例五〕〔事例六〕からただちに、女高師が戦時体制と無縁であったと断定する事はできない。女高師オーラルヒストリーは蓄積が少なく、またあくまで平成の現在から過去の自分を回想するために、同時代的にそのような認識であったとは限らない。しかし、H氏もE氏もパーソナルストーリー、ドミナントストーリーでは戦争にまつわる苦勞・苦痛を語っている。少なくとも語り手は、社会通念であるドミナントストーリー＝戦争の苦勞とは一見矛盾するような女高師経験を聞き手に提示しても構わない、と「判断」したと考えられる。

女高師卒業生のモデルストーリーのもう一つの特徴は、当時女性としては最高クラスの高等教育機関に在学し、社会的に高学歴女性として扱われてきたことに対する自覚の強さである。この自覚の強さは、高学歴を積極的に前面に打ち出すものではなく、「高等教育を受けた自分は社会に貢献しなければならない」「高等教育を受けさせてくれた親や教員の恩に報いなければならない」という責任感であり、これは女高師へのアイデンティティの強さと表裏一体であるといえる<sup>(10)</sup>。このような語り手が、女高師とお茶大との連続性を意識した時、語り手は聞き手を「モデルストーリーをある程度共有できる存在」「モデルストーリーに共感してくれる存在」として認知し、それが「学校の先輩・後輩」スタンスを形成すると

考えられるのである。前述の戦時期の女高師経験を語る「判断」も、このような思考の所産であると推測できる。

## おわりに

女高師オーラルヒストリーに現れる「学校の先輩・後輩」というスタンスは、女高師とお茶大との連続性に対する認識を表象するものであると考えられる。聞き手がお茶大関係者であったことは、連続性を肯定するか否定するかにかかわらず、語り手に女高師とお茶大との連続性を無意識かつ不断に意識させたと推測される。そして、語り手が何らかの連続性を肯定した場合に、前述した二つの特徴を持つモデルストーリーが聞き手に提示されたと考えられるのである。

これを、女高師卒業生に対する聞き取り調査に現れる特徴的な「回路」であると仮定するならば、二つの問題点を検討する必要がある。一つは、「雪だるま式サンプリング」により語り手が選択されているため、モデルストーリーを共有する語り手のみが抽出されているのではないかという点である。雪だるま式サンプリングは機縁法とも呼ばれ、最初の語り手から次の語り手の紹介を受けたり、談話から得た情報により聞き取りに応じる可能性が高い対象者に接触する手法である。<sup>(11)</sup>すなわち、今回の女高師オーラルヒストリーは、在学中に戦時色を強く意識することなく、女高師に強いアイデンティティを持ち、戦後のキャリアで女高師経験を活かした人物の聞き取りに偏っている可能性は否定できない。今後は対象とする在学時期を広げ、中退者や同窓会活動に消極的なグループにも聞き取りを実施する必要があるであろう。もう一つは、個人の意識において、女高師とお茶大の連続性を肯定する要因の特定である。本稿では可能性として校舎が同じ場所にあること、女性の高等教育機関であることを挙げたが、戦後の大学進学率上昇や女性の高学歴化により、「戦前社会における女高師の位置づけ」と「戦後社会におけるお茶大の位置づけ」はイコールではないと考えられる。今回は、語り手の多くが戦後も学校教育に従事した経験があることから、戦後社会におけるお茶大の位置づけの変化をある程度認識して

いるものとして扱ったが、社会における女性の高等教育機関の位置づけの変化を考慮する必要がある。

女高師オーラルヒストリーの実施・分析・考察は、女高師からお茶大への移行期の状況を、制度だけではなく卒業生・在学生の認識も含めて明らかにするための基礎作業であり、史資料間の有機的な連関性をふまえ、女高師からお茶大までを総括した大学史を立体的に構築するために必要な作業であると考えられるのである。

(お茶の水女子大学人間文化研究科比較文化学専攻平成一三年三月修了、

映画専門大学院大学准教授)

## 注

(1) 桜井厚『インタビューの社会学』せりか書房 二〇〇二年、九頁。

(2) 『お茶の水女子大学百年史』『お茶の水女子大学百年史』刊行委員会、一九八四年。

(3) 当然、研究や展示、大学史作成にあたっては、女高師オーラルヒストリーと他の史資料との照合や、談話内容の真偽確認は必須である。語り手や遺族の高齢化・逝去を考えると、今後は聞き取りの実施段階から検証可能性を念頭に置く必要があるであろう。

(4) 前掲『インタビューの社会学』二八―三一頁。語り手による校正は、インタビューのテンプ起こしに対して行っているため、広義には「対話」を逸脱しないと考えられる。

(5) 依頼経緯については和田華子「大学史資料としてのオーラルヒストリー」(『お茶の水史学』五一号、二〇〇八年)

を参照。

(6) 原曲については現在調査中である。

(7) 佐々木啓子『戦前期女子高等教育の量的拡大過程―政府・生徒・学校のダイナミクス』東京大学出版会、二〇〇二年。

(8) 大江洋代『『女高師アイデンティティ』の構造―女子高等教育を担った戦前女性エリート』『お茶の水史学』五一号、二〇〇八年。

(9) 前掲『インタビューの社会学』三六頁、武田徹「作品化の技術」御厨貴編『オーラルヒストリー入門』岩波書店 二〇〇七年。

(10) このような自覚の形成過程と要因については前掲『『女高師アイデンティティ』の構造―女子高等教育を担った戦前女性エリートの社会的使命』を参照のこと。

(11) 前掲『インタビューの社会学』二五頁。